
私はアイツの玩具じゃない！！

ユアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私はアイツの玩具じゃない！！

【Nコード】

N4306U

【作者名】

ユアン

【あらすじ】

あるところに、普通に普通の何の変哲もない少女、相崎ゆなが、たった一人に人生狂わされる物語。

「私の人生返せ！」

「俺に全部頂戴。」

毎度毎度繰り返される言葉のキャッチボール（すつかすか）

果たして、ゆなの運命はいかに！？

お気に召しましたら、お気に入り登録よろしく願います！

(作者がめっちゃ喜びます)

プロローグ！（前書き）

基本的に主人公が説明口調でしゃべります。

ブローグー！

「ぎゃああああ~~~~~!!!!!!」

『こんな始まりだった私の物語』

事は冒頭に戻り

「おはよー」

「おはよう」

皆さんおはようございます。 えゝ私、この物語の主人公 相崎 ゆ
な と申します。 はい

高校三年生の18でございます。

容姿は、・・・まあ普通です。 こげ茶のセミロングの髪に、たれ眼
で、身長は164センチで、

運動神経は・・・亀です。

唯一の自慢箇所といえば髪がサラサラってことくらい。 あと身長？

まあそんなことは置いといて

えゝ、この物語はフィ・・・フィックスション！ずび・・・花粉で
す・・・

あゝ、この物語は「おはようゆな」

「・・・おはよう・・・」

「うわ！こわ！ゆな顔すごく怖いよ！・・・私なんかした？」

「うん」

「えゝ・・・この間のタコさんウインナー？」

「いや・・・もういいよ」

この女、否この友人は私の唯一といっても良いくらいの友人 風早
凧だ（でも断じて親友じゃない）

黒髪で腰くらいの長さ、身長は私よりもでかい・・・！（なんてやつ！）

顔はもうキレーキレー・・・もうほんと綺麗な顔ですよ・・・

切れ長の眼にあまったるうゝいハスキーボイス

女子にも男子にも人気

えゝ色々面倒くさいけどクラスの人気者でムードメーカーかってやつだ。うん

こんな辛気臭い私にあれこれかまってくるやつ

「えゝ・・・まさか！昨日こっそり食べたゆな秘蔵の特性だしまき卵を食べたこと・・・！？」

「なに！？あんた昨日「私知らない」「って言ったじゃない！！！」

「いやゝ、星がついてる時点で気付こつよゝ」

「はああ！？何？私のせいなわけ？」

あゝ、しまった。またこんな可愛くない口調に・・・

「えゝ、じゃあ両成敗ってことで」

これ以上文句を言つとさすがの私でも言いすぎだろ・・・と思い

「・・・しょうがないなあ」

不満たつぷりの顔で言つてやる

「くすつ、ゆな可愛い」

「どこが！？」

と、まあこんな平和な日常を送っていたわけです。

ブローグウ！（後書き）

行き当たりばったりで書いていますが、二日に一回の最新にしたいなと、

思っておりますので

こんな作者ですが、どうぞ暖かいお心で見守ってやってください。

じじじおーっ！

まあ、そんな感じで話（ケンカ？）をしていたら

キンコーンカーンコーン・・・

・・・当然チャイムが鳴るわけで（注！ここは校庭だ！）

「ぎゃあああ！授業！？教室！ここ校庭！！」

「もっ落ち着いてっゆな！」

「あんたが落ち着きすぎなんじゃない！！あゝもう！実は今日風邪でした！なんてことに・・・！！」

「え！まじ！？学校さぼるの！？？」

「何そんなに顔キラキラさせてるのよ！！」

「えゝ良いじゃん！さぼろうよ」

「ダメ！サボりたいけどダメなものはダ・・・」

「・・・ダメ・・・？」

そこには、さつきと打って変わって

こいつ・・・！自分の魅力を最大限に使ってきやがった！

この顔に皆やられるんだよね・・・（私はちよつとよ！）

はあゝ最初もそうだったなあ・・・

たしか・・・

「こんにちは！」

「はあ、コンニチハ？」

このとき確か、何この人？って思ったんだよね

「私、風早凪！よろしくね、ゆな！」

「……………」

思わず私は黙り込んでしまった、だってこんなキラッキラした人がこんなモサッモサッした私のところへ来るなんて……

だがしかし！

あいさつ無視しようと思ったんだが、キラキラスマイルからだんだん変わってきた
少し寂しそうな顔に皆が……………怖かった……………！！
皆の視線が痛すぎて

「はあ、どうぞよろしく。」

って、言わざるをえなかったんだよなあ

いやあ、このとき私めっちゃ人付き合い悪かったしな……（今も
だけど）

まあ、そんなこんなで今現在にいたるわけだけでも・・・？

今・・・は・・・学校！？そうよ！！

「しっかりしろ私！って・・・」
「いどいどお！？」

その瞬間にい!?

「しっかりしろ私! って、ここどこお!？」

その瞬間? 私はうす暗い路地裏? つばいと頃にいました

ちよつと考え事してたらなんか違う場所にいました

「うぜえ!! じゃない! ちょっと風! ここどこよ!？」

「えゝ・・・教えてほしい？」

「・・・・・・・・いい。」

「ええ！？そこは教えて？って可愛く決めポーズして言おうよ！？」

「なんでそんなことに可愛さを求めにやらん！？そして決めポーズの意味がもつと分らん！！」

「えゝゝゝ女の子は可愛くなきゃ」

「あつそうですかゝゝゝ。」

はゝゝゝ鏡見てから言つて欲しいんですけどゝゝゝ

べつに褒めるわけじゃないが（決して！！ここ重要）言つてやりたいゝゝゝお前のほうが綺麗だと

そしてお前のせいで私はさらに霞んでいるのだと！！くそうゝゝゝ

「ゝゝゝ何を考えているのか手に取るように分かるけどゝゝゝゆなの方がずっとずっと可愛いよ？」

「ゝゝゝ眼科行つたら？」

「ひど！？今めっちゃ良いこと言つたと思つんだけど！？」

「えゝゝゝあんたに言われてもゝゝゝ」

「・・・前から言おうと思ってたんだけど、」

「なに？」

とうとう私に愛想尽かしたか？

私は一人が好きなんだ・・・！

喜んで縁切りさせていただこう！！

「名前で呼んでよ！」

「わかった・・・って、ええ！？」

「やった！約束だからね！」

「ちよっ「うん、そうだなあ・・・もし名前で呼ばなかったらばつゲームね！」

「ちよっとまって！今間違えたの！取り消してちょうだい！」

「・・・ゆなつて・・・私の名前を呼ぶことすら出来ないのか・・・」

はあ！？何だつて？私に出来ないことがあると？いいや！できる！
私はやるわ！やってみせる！

「望むところよ！」

「じゃあ呼んで」

「え・・・今？」

「望むところなんでしょ？」

なんか・・・ものすごく今更なんだけど、うまくコントロールされた気がする・・・！

「ふっ・・・言つてやろうじゃない・・・」

何よ、名前を呼ぶくらい簡単よ こいつは犬。犬犬犬・・・

「風」

カッ！！！！

その刹那、
凧の笑った顔が見えた

・ ・ ・ 現在進行中で落ちているのである ・ ・ ・

「ギャー——ギャー——ギャー——！！！！！！！！！！」

なにこれなにこれ!?!?!どうして穴が!?!やだやだやだやだ!
!!

てゆーか! 風の名前を呼んだ瞬間よね!?

てゆーか! あいつ私が落ちる瞬間めっちゃ楽しそうに・・・なんか・
・妖艶に笑った・・・

なんか、風であって風じゃないような感じがした・・・

だあゝゝもおゝゝ!?!?!!

しっかりしろ私!!

てゆーかぁ・・・

「これいつまで落ちてんのおおお!?!?!?!?」

そつ、これだけ考え事してもまだ地面が見えないのだ・・・

いやいやいやいや!!--今更過ぎるけど地面が見えたらどうしよう!!--

あゝあ・・・私死ぬのかな？

意外と短い人生だったな・・・

でも・・・私だって・・・一応女の子なんだから・・・

「ひっ・・・くっ・・・」

中学校時代から誰にも見せたことがない涙

一応私にも涙があつたんだなあ実感

「うう・・・なん・・・で！」

だれにも見られてないんだったら少しくらい良いよね・・・

「もお・・・やだ・・・なんで・・・！皆嫌いだ・・・」

だから友達だつて作らなかった

ましてや親友とかも作らなかったのに・・・！

「なのに・・・！なんで・・・よりによってあいつがあ・・・！！！！」

「あゝ！ゆな今私のこと言っただでしょー！」

ひくっ

その瞬間私の涙は止まった

歯をくいしばれえ!!

その瞬間、私の涙は止まった

「ねえねえねえ！今私のこと『あいつ』って言ったでしょ！」

「・・・・・・・・」

「うふふ……どんな罰ゲームにしようかな？」

「……え」

「え？ななに？」

「歯を……くいしばれえ……！」

「ぐふう……！」

「・え・・・え？」

「いつからいた！？何をみた！！！？あ”あ！？」

「ちょ、ゆ・・・ゆな？怖いよ！？」

「質問に答えろよ？」

「な！なにも見て「嘘なら殺」泣き顔見ましたあ！すいませんん！
」！」

「・・・・・・・・殺す・・・・・・・・」

「ちょ！？ゆな！？落ち着いて！！」

「・・・・・・・・だ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・へ？」

「も・・・・・・・・やだ・・・・・・・・」

「もおやだ・・・・・・・・なんでよお、・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ゆな・・・・・・・・」

「うう・・・・・・・・ひুক・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そっち行っても良い？」

「・・・・・・・・来んな・・・・・・・・」

「うん」

「来るな・・・・・・・・」

「
うん」

「・・・なんで来るなって言ってるのに・・・来るんだよあ・・・」

「・・・うん・・・、でも・・・ゆな、泣いてるんだもん・・・」

「・・・だって、風が・・・」

「
うん」

「・・・風のせいだこのやろあ・・・」

「うん・・・いめんね」

その瞬間、私は泣き寝入りをしてしまい、眠りにつく瞬間

風が泣き笑いをしていたような気がした

ありえない!!! (前書き)

今回かなり短めです
すみません・・・。

ありえない!!!

「……………で……………から……………頼ん……………ぞ……………」

……………誰かの話し声がある……………? ?

……………じじじじ?……………

．．．．学校は？．．．．目覚まし鳴った？

「遅刻はいかん！！！！」

ガバツ！！

飛び起きた私が目にした光景は．．．．

黒髪の男が．．．

セーラー服を着ている姿だった……

「ぎ……ぎゃあああああ！?!変態いゝゝゝゝ!!?!?!?」

「わああ!?!?!び……びつくりしたあ……」

「ななな!?!?!なんつで、男がセーラー服を!?!」

「起きた?」

「はっ!まさか、女装趣味!?!そっね!そっに違いないわ!?!」

「あ~~~~、ちょっとづるさいよ?」

「だって!男が女の格好してるんだ・・か・・・ら・・・?」

その瞬間

私にはありえないものを見てしまった

なんでえ？（前書き）

一回完成したものを消してしまい、
書き直しました。

なんでえ？

その瞬間 私はありえないものを見てしまった

・・・え？なに？・・・なんで？

「あんだ・・・・・・・・風・・・・・・・・？」

なんで？

「そっだよ。ゆな」

風は女の子、でも・・・・・・・・髪が短い

「・・・・・・・・あ！髪が短いからびっくりしたわ！」

「ああ、これか」

・・・・・・・・どうしよう、なんか・・・・・・・・????

あたまがぐちゃぐちゃ・・・

「・・・ねえ、ここどこ？なんで髪切ったの？なんで私ここにいるの？」

なん「ちよつと落ち着いて」・・・うん「

そうよ、私、落ち着いて

「ゆな、ここは地球じゃないよ」

・・・そうよ、ここは地球じゃない。

「うん、地球じゃ・・・ない？」

「そう、ここは異世界」

・・・どうしょ、夢見てるわ

「・・・ちなみに夢じゃないから」

「なんでわかった!？」

「愛の力」

「・・・そう」

「ねえ、・・・ゆな・・・」

・・・なに？

「ゆな」

・・・なんで？

「・・・やっぱり・・・そう・・・だよね」

なにか・・・？

「變じてるよ」

どうしてそんなに

「悲しそうな顔をするの・・・？」

「・・・え？」

・・・あ、やば・・・なに言ってる・・・私・・・

あたま・・・が・・・ぐるぐる・・・

ばたっ

「ゆな!？」

あの・・・ね・・・

(「・・・ども？」)

だ・・・きー！

(「・・・だれ？」)

・・・さまー

・・・

．．．．．さ．．．の．．．せか．．．で．いちば．．．．．るの

（．．．．わた．．．し．．．？）

．．．．ン．．．

（．．．．だれ．．．男の人．．．？）

．．あ．．．．．るよ．．

（．．．私．．．．．なんで、

泣いてるの？

なにすんじゃポケエ!!!!!!（前書き）

あってもなくても良さそうな部分です・・・！

なにすんじゃボケエ!!!!!!

私、
なんで泣いてるの？

ぼんやりと、夢を見ながら

心が泣いていた

その夢には、たくさんの子供の声と

たった一人の……男の人の……声……

ツウ・・・

「やっぱり・・・」

思い出すと涙が出てしまう

「・・・なにが？」

「・・・ふえ？」

「なんで泣いてるの？」

「・・・・・・・・え？・・・・・・・・あ・・・・・・・・う？」

まさか返事がかえってくるとは思わず、我ながら間抜けな声でた

「悲しい夢を見た？」

・・・・・・・・言い返すのもめんどうだ・・・・・・・・

「・・・・・・・・ちがう・・・・・・・・だた、変な夢見ただけ」

「ゆなは嘘つきだなあ」

チュッ

・
・
・
・
・
・

「あれ？反応なし？じゃも一回」

チュウ・・・ペロッ

「あれ、ゆな？」

「あ……」

「あ、やっと反応返ってきた」

「あた……いまっ……キッ……は？え？」

「キスしたんだよ」

「……」

「あはっ」

「な．．．なにすんじゃポケエ!!!!!!!!!!」

どがあっ!!

「ぐはっ!!」

やっちまったぁ！！！（前書き）

また・・・書き直しました・・・
全部消してしまつて・・・
やっちまったぁ！！！！

やっちまったぁ!!!!

「何すんじゃボケエ!!」

「ぐはぁ!!」

・
・
・
・
・
・
・

」
ううう・・・泣きそう・・・」

「こっちのセリフよ!!」

うう・・・ファーストキスにこだわるつもりは無かったけど・・・

初めてだったのに・・・

・・・くっ!!!

ドカァ！！！！！！

「ぐっはぁ・・・！！！！」

「ま・・・また！？」

「乙女の代償としては安いもんよ」

「・・・シクシク・・・」

だいたい！初キスの相手が女同士なんて・・・

そつよ！・・・おん・・・な・・・同士・・・？

「~~~~~！？！？」

ヒュッ
パシイ！！！！

「なっ！？」「のっ」「なんども・・・っへ・・・？」

一瞬、誰の声かと思うくらいに……低かった

「大人しく、殴られると思ったら……大間違いだよ」

「あ……や……」

やつちまったあ……！！

やばい！怖い！危険！

...--U'9T-C-U'N-U'9T-C-U'N-C-U'N

めっ
ちや
怖い
・
・
・
！

・
・
・
・
・とりあえず
・
・
・

「う・う・う・う・めん・めん」

「ん……どうしよっかなあ」

「っっ、っっっっ……!!」

「この！私が！謝ってんに……!!」

「ん………そうだな……」

「ゆなの人生、俺に全部頂戴」

なんでなのよあ・・・？

「ゆなの人生、俺に全部頂戴」

「・・・はい？」

・
・
・
・
・
・
あ~~~~ん~~~~
・
・
・
・

「
ゆーなっ！」

「
ああ、うん、聞いてますよ、うん、
ちやぁんと聞いてますよ、
うん」

「
こらこら、大丈夫？」

「もう一度お願いできます?」

「だから! ゆなの人生全部俺に頂だ! はい! ? なんですって!
?」

「……ほんと、ゆなって……可愛いよね」

「今ので何故そうなる! ? ?」

「くすっ、かぁわいい! !」

ぎゅ~~~~~

「ぎゃああああ!!--くつつくなあ!!--!つつて」

なんだろう?なんか・・・あつたかい・・・

「は~~~~・・・やっぱ・・・直接が一番だよね・・・」

「は……?」

直接? ……ん? ……どうしょ ……なんか ……生々
しい ……感触 ……が

チラッ

サッ、つと顔が強張った

なぜなら

ここはベッドで、こいつと、私が

素っ裸で（上しか見えないが足の感触で）

寝ていたからだ・・・

さらに・・・風に・・・胸が・・・無い!?!?!

「ぎ・・・ぎっせむしゅー!」

「はいお静かに」

「むぐっ!ぐっ!ぶっ!んっ!」

「はいはい、悪あがきしないで」

「ぐっ……ふ……う……」

「あゝあ……男ってとうとうばれちゃったあ」

「ばれちゃった！？ばらしたの間違いだわ！！」

「ポロッ……」

「えっ」

ポロポロ・・・・・・・・ポタツ・・・パタタツ

「えっ？えっ？ゆなっ？」

「ふっ、ん・・・・・・・・ふ・・・・・・・・むぐ・・・・・・・・」

ぱっ

「あ、えっとごめん！え・・・・・・・・どうしよ・・・・・・・・」

「うっ・・・・・・・・ふえ・・・・・・・・ひっく・・・・・・・・なんでなのよぉ・・・・・・・・うっく」

「あ……あ……」

ぎゅ

「触るなばあ……」

「うん、めん……めんね」

「うえ……ひゅく……」

いで

「お願いだから、嫌いには……ならな

なんでこんなことしたのよー!! (前置き)

今回ちょっとプログラムっぽいです

なんでこんなことしたのよぉ!!

「お願いだから・・・嫌いにはならな

いで」

「……むっ、矛盾してるわ……すごく……！」

「そうだね。でも、嫌いには絶対になつてほしくないんだ……」

「………っ」

なんなの？なんなの！？

わけの分らないことだらけで、頭が一杯一杯で

風が男とか、

ここは私のいた世界じゃないとか

裸とかベッドとか!!

・・・その原因が全部・・・風だってこと・・・

なのに

「ここまでしておいて、嫌いにならないで?・・・ふざけるな!!」

じゃあ!・・・じゃあ!!なんでこんなことしたのよお!!」

「・・・」

「．．．．．なによ！なによお！！なんであんたがそんな顔するのよ
「？」

「．．．あやまってすみことじゃないけど．．．ごめん

「~~~~!!!!うっっ．．．わっ、私の人生返せ!!!!」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．うっっ．．．くっ

「ふえっ・・・！なんで、あんたまで・・・！泣くのよ！！」

「・・・だって・・・ゆなに・・・嫌われたあ・・・！！」

「・・・」

「・・・」

「ばあーか！！このくそボケ！！アホ！！」

「ううっ、ひ・・・ひどい・・・」

「……………あんたの……………!ことは……………嫌いじゃないわよお……………」

「……………え?……………なん……………で?」

「……………嫌いだったら……………ここまで怒らないわよ!……………」

「……………う……………ふえ……………ゆな……………!……………!……………」

「だから!抱きつかないでよ!……………読者の皆様が怒るわよ!……………こいつ

らいつまでやってんだー！ってー！」

「うう．．．じゃあ．．．言っけど．．．．．ゆな、前．．．見え
てる．．．」 ポッ

「はあ！？なにが見え．．．て．．．きっ！きゃあああああ！！
！！」

じんのばかたれがあー！！

「き、きやああああああ！！」

「！！」

ばっ！

「み、み、み、見た！？見たの！？」

「みみみ見てない！！見てないから！！」

（どうしょ、心のビデオに録画しましたなんて……言えない！！）

「嘘よ！！見ていなかったらそんな……前が見えてるかなんて分かるはずない！！！！」

「うつゝ、じゃ、じゃあ！ゆなはなんて言ってほしいんだよ！？」

「うつゝ……そういう事は速く言いなさいよ！……」

「いいじゃん！……減るもんじゃないんだから！……！……あつ」

「……ほう……つまり、心行くまで見ていた、と」

「え、や、そ……そんなわけ「問答無用！！！」」

「こんのばかたれがぁー！！！！！！！！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁー！！！！！！！！」

ばっきゃぁぁぁー！！！！

「ふっ、さらば……友よ……」

そういえばさあ・・・

「・・・そういえばさあ・・・」

「なによっ」

今私は簡素な白いひざが隠れるくらいのワンピースを着ている状態

尻は下にジーンズ、上に白のＴシャツを着ている

ついさっきまで戦闘をベッドの上で繰り広げながらも

二人に限界が来て一時休戦中だったときだ

「ゆなつて……………」

「……………な、なによ。はつきりしなさいよ……………」

「……………」

「……………」

「意外と胸でか「ふざけたことばかりいってないで用件言えよ」はい……」

「いや……、俺のことさ……どうも思わないのかなあって……」

「……はあ？」

一瞬何を言われたのか分からなくて、素っ頓狂な声を出してしまった

「いや、だってさ？ただ、男！？って驚いただけで他の反応がなく

て．．．寂．．しい．．な、と」

カアア．．．

真っ赤になった

あのいつも、余裕の、あの、風が

「．．．．．ぶっ」

「な！？なんでそこで笑うのさ！」

「いやっ、だって、くっ．．．．あははっ、」

「……………もう……………」

……………

しばらく笑い続けてやっと笑いがおさまり

「……………あ……………久しぶりにつぼったわ……………」

「そうつすか……………」

諦め半分の答えに、また笑いができそうになった

「ふふっ、私風のこと初めて可愛いつて思ったわ」

「・・・・・・・・そっか」

嬉しそうに、ふわっと風が笑った

「ゆなが笑ってくれるなら、俺、笑われてもいいや」

ドキッ

「えっ？」

（え、何？どうしょ．．．え？今私．．．ときめいたかも．．．）

「．．．ふんっ．．．」

とても．．．懐かしくなった

(この心は誰の心?)

あう！

凧の笑顔を見て

心の中で、私じゃ無い私が笑う

そして悲しむ

(・・・なぜ・・・?)

風が好き

(そんなのありえない)

あなたが好き

(・・・だれ?)

愛しているの

(ちがう)

どうして？

(私じゃない？)

どうして、あなたが、こんなことを・・・

(誰？誰なの？私はだれ？)

君を愛してるから

ドクン

今度は男の声だった

(知らない・・・こんなの私は知らない!!)

その瞬間、私じゃない私がこっちを見て

「しめんなさい」

その瞳には、私が映ってた

はっ！！

「いやあっ！！」

「ゆな！？」

「はっ・・・あ・・・あ？」

「ゆな！？ゆな！！」

「わた・・・し？」

目の前がくらくらする

「え・・・ゆ・・・な？・・・その目・・・」

え・・・なに？

「・・・風・・・なんで・・・？・・・あんなこと・・・」

！？だれ？私の声！？

「ゆなっ！？ユナなのか！？」

ちがう！私じゃない！！

「ちがう・・・！私はちがう！！わたし・・・は！？・・・っああ！！」

「ユナッ！！」

ドクンッ

「・・・っは・・・は、はぁ・・・はっ・・・」

ぐるぐるぐるぐる頭の中だけでなく体も、全身がおかしい、

何が起こっているのか全くわからない

頭がついていけない

助けて、助けて、助けて・・・

「・・・そうか・・・!?!?!」

何？

「う．．．けほっ．．．」

「あ．．．ああ．．．やっと．．．!!．．．やっとだ!!!!」

「．．．．．？な．．．風．．．？」

怖い、と、初めて風を見て思った

風はいつもクルクル表情を変えながらも、いつも

明るい、眩しいくらいの笑顔をしていた

なのに・・・

今は・・・

「あはっ！フッフッフッ！」

どこか狂気めいた瞳で、私じゃない、私を見ていた

「ふはっ、ははっ!!!!とうとう!!!!とうとうだよ!!!!会いたかった
よぉ!!!!すごく……すごく!!!!」

ゆな、ゆな、ゆな、ユナ!ユナ!ユナ!!アルディーン!!!!」

「何言って……?!」

ドクンッ

「アッ!？」

瞬間、焼けるような痛みが全身を襲った

でも、それもほんの一瞬だった

次の瞬間

「え．．．．？」

ありえないと思いたかった

だあ
つて

ありえないと思いたかった

「あ……あ……あ……なに？……なにこれ？」

なにになになに！？！？なんなの！？

今、私の手の上には、長い長い、・・・黒髪がのっている

「や、・・・落ち着いて私、落ち着くのよ私」

言葉にしないと、なにかもが崩れ落ちそうで

「・・・はー・・・すー・・・ふー・・・はー・・・」

．．．．とりあえず深呼吸．．．

「．．．よしっ！とりあえず、この黒髪は．．．私の髪？」

長く、艶やかな黒髪は、ベッド中に広がっていて3メートルぐらいありそうだ

「．．．．．で、ちょっと馬鹿風！！」

「なあに？ユナ」

ぞわっ

いつの間にか、私の後ろにまわってから耳元で返事が来た

「きっ・・・気色悪い声で囁くな!!」

「だあって・・・嬉しすぎて・・・ね

「ひとつ、聞いていいかしら

「いくつでも良いよ」

「~~~~~離れる!」

「やあだあ〜・・・」

ぎゅっ、とみらに抱きついてきた

「いやだ！はなせ変態！！」

「この状態でしか答えない」

「・・・・・・はあ」

・・・・・・

「じゃあ、聞くけど、この髪はなんなの？」

「本来の姿」

「……話になってないのは気のせい？」

「ありえないわ」

「あれ？記憶は受け継がれなかったの？」

「残留程度に何か入ってきた気がするわ」

「あゝ、ちなみに、瞳の色も変わったよ」

「・・・そう・・・」

「あれ？意外と驚かないね」

「・・・もうなんでもドンと来いだもの・・・」

「・・・言っただね・・・？」

ソワッ！！

「うそうそうそ！！今の嘘！冗談！！」

「まあまあ、落ち着いて、ね？」

「迫ってきて言う台詞じゃ無いわよねー！」

「うんうん」

「え、あ、わ、ちよつま！」

きいやあああああ………！（心の声）

私のばかあああああ！……！！……！！

きゃーわーー！きいいやああ……！！（注！心の声）

「まっ、まままま！まてえい！」

「ま・て・な・い（ハート）」

「な、なんで迫ってくるの!!」

「それはあ・・・ゆなが可愛いから」

いつのまにか風と私の距離は縮まっており

しかも抱きこまれて、抵抗しても無駄という状況に陥っていた

「甘ったるい声で囁くなあ!!しかも耳元っ!!」

フーッ

「んうっ」

ナンカハズカシイコエデターー！！！！！！

「かあわいいっ」

「っ！○× □&%\$&#!:!!」

「何言ってるかわかんないよ？」

「うっ！ばかやろおおおおお！！！！」

じたばた暴れて暴れまくっているのに腕も押さえられて足も絡み付けられ

・・・もう手遅れかもしれない・・・

「んっ……でもね、俺、言ったよね？」

「なっ、何を!？」

「名前以外で読んだらお・し・お・きって」

「……………」
(脳内記憶リピーター中)

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「名前で呼んでよ!」

「わかった・・・って、ええ!？」

「やった!約束だからね!」

「ちょっとうん、そうだなあ・・・もし名前で呼ばなかったらば
つゲームね!」

「ちょっとまって！今間違えたの！取り消してちょうだい！」

「・・・ゆなつて・・・私の名前を呼ぶことすら出来ないのか・・・」

「はあ！？何だつて？私に出来ないことがあると？いいや！出来る！私はやるわ！やってみせる！」

「望むところよ！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

もし名前で呼ばなかったらばつゲームね!!

ばつゲームね!!

あつ
・
・
・
・
・
・

!!

わたしのばああああああああ!!

絶対よ．．．．（前書き）

わずかばかりエロさが入っております。
苦手な方は回避をお願い致します。

「ね、だから罰ゲーム」

「あ、わ、ま、まって・・・！」

「んー、待てないってさっきも言った」

どうしよう、なんてもう何百回も考えた

「はいはい、わがまま言わない」

わがまま！？わがままって言った！？

「わがままじゃない！！！」

「もー……うるさいな」

むちゅって音がした

「んうっ!？」

と思ったら・・・くちゅって音がした

「ふー?!?!?んむあっ!ふっ・・・うっ」

うっ……どうしようっ……気持ちいかも……

はっ

「ふあ？」

視線だけを下へ向けてみると

「んー！？んっ！う！」

下着だけになってた

「んー！！んうー！はなっ！れぁんっ！ー！」

く~~~~っ!!!!なんで舌と口がッ器用に動いて、手も動かせるのよおおおお!!!!

プチッ

!!?!?!?!?!?

「だっ!!!やめえ!!んあんん……!!!!」

スルッ

ブッ、ブッ、……ブラがはずされた~~~~~!!!!!!

「逃がさない……………」

やあっと口がかいほうされ

「あ……あ……」

逃げようと……してるのに腰が……抜けた……

「……大丈夫、痛くないようにするから」

にっ
っ

怖いのに、逃げたいのに、
．．．．．嫌じゃないなんて．．．

これも記憶かなんかの变化なの——？

「．．．．．絶対よ．．．」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4306u/>

私はアイツの玩具じゃない！！

2011年9月14日03時26分発行